

諸君ヨ一人ハ大切ナリ、一人ハ大切ナリ

（『新島襄全集1』107頁）

こしかわ
越川 弘英（キリスト教文化センター副所長）

同志社創立10周年記念演説（1885年12月18日）における新島の言葉の一節である。このとき新島は一年半に及ぶ欧米旅行から帰国したばかりだった。多くの来賓を招いた盛大な式典の場で、新島は彼の不在中に退学処分到处せられた7人の学生たちのことを覚えてこの言葉を語ったのである。

新島は教育者であると同時にキリスト教会の牧師でもあった。おそらくこのとき新島の心中に去来していたものは、イエス・キリストが語ったとされる、群れを離れ去った一匹の羊とその羊をどこまでも探し求める羊飼いのたとえ話だったのではないかと想像する（マタイによる福音書18章12節以下参照）。

「同志社の教育」を考える時、私はいつもこの新島の言葉を思い起こす。ひとりの人間を「大切」にしようとする精神と姿勢がなければ、人が人と出会い、学びあい、育ちあうという営みは決して成り立たないと思うからである。私たちは単に時代の求める人材を大量生産するような作業に関わっているわけではない。「同志社は隆なる二従ひ機械的ニ流るゝの恐れあり」という新島の警句（『新島襄全集4』403頁）と共に、今日の同志社に働く私たちがとりわけ強く心に留めるべき言葉のひとつであると思う。